

私のおすすめ

自然と人間

図書

大学院音楽研究科博士後期課程音楽研究専攻 3年 筒井紀貴

『ファウスト』や『ヴィルヘルム・マイスター』、あるいは「魔王」「野ばら」によって馴染み深いゲーテだが、彼が長年、自然科学の研究に注力していたことはあまり知られていない。ゲーテを文豪としてのみ知る者にとっては驚くべきことだが、彼は『色彩論』をはじめとする自らの自然科学に関する著作を、今や古典文学として評価されているような他のどの作品よりも重視していた。イタリアの地で多種多様な植物やギリシア芸術に触れたゲーテは、スピノザ研究の影響の下、自然や創造的芸術の内に潜む、一なる必然性を見出してゆく。彼はニュートンに代表されるような合理主義的な自然科学の手法——すなわち自然を要素に分解して全体を説明しようとする方法を拒絶し、人間の直観に現れる、生き生きとした自然の姿を探求しようと努めた。ゲーテにとって究極の芸術は自然であって、自然を認識することは、芸術を創造することにも等しかった。

反合理主義を標榜することとなったゲーテの自然科学は、やがて19世紀後半になって実証主義的な自然科学への反発の流れとともに再興し、そして戦後にも、ハイゼンベルクら物理学者によ

て顧みられる。昨今の「オーガニック」や「ビオ」ブームも、その系譜をたどれば、ゲーテにまで通じている側面も否定できない。原型やメタモルフォーゼ、根源現象といったゲーテ自然科学の概念は、例えば「光の画家」ターナーや、バウハウスでも教鞭を執ったクレーなど後世の芸術にも影響を与えてゆく。音楽も例外ではなかった。ゲーテの自然観は、人間が見る自然を扱っていると同時に、自然の中に生きる人間の在りようについて問いかけている。

高橋義人はこの理念がどのような背景から導き出され、いかなる過程を経て、ゲーテの象徴的な自然観が形成されていったのかを精緻に描き出してゆく。ゲーテの自然観に触れると、私たちは例えば『ファウスト』における筆致に、また詩の表現の端々に、この「生ける」自然観が確かに反照していることに気付く。そのようにしてゲーテの言葉をたどってゆくと、きっと今まで見ていなかった、新たなゲーテ像が見えてくるだろう。

『形態と象徴：ゲーテと「緑の自然科学」』
高橋義人 岩波書店 1988
請求番号●J60-975



つづい のりたか ● かつてのテーマだった環境問題からすっかり離れていたつもりが、気が付けばまた自然と向き合っています。

美しい雅楽装束たち

図書

図書館嘱託職員 土屋 絵理

私が雅楽と出会ったのは学部2年生の授業です。それまで、お正月のテレビや神社などで雅楽を聴いたことはありましたが歴史も長く、難しそうな音楽だと思っていました。しかし、いざ授業で実際に演奏してみると、とても魅力的で奥深い音楽だと気づかされ、授業の後、図書館のOPACで”雅楽”と検索してCDを端から聴いたことを思い出します。

さて、私がご紹介するのは表紙に使われた舞楽^{らんりょうおう}「蘭陵王」の華やかな装束が印象的な『美しき雅楽装束の世界』という本です。1200年以上の歴史を持つ雅楽は、平安時代に大成した音楽と舞踊のことを言い、古くから宮廷や寺院・神社などで盛んに演奏されてきました。その装束も魅力の一つで、中国や朝鮮などアジア大陸からの影響を色濃く受けた装いは、和服とはまた一味違った新鮮な味わいがあります。

雅楽装束は、舞楽^{くまのりょうおう}や国風歌舞、管絃などそれぞれの種別によって異なるものが用いられ、その中でも、最も華やかなものは舞楽の装束です。舞楽で用いられる装束は平安時代以来の伝統に

寄りつつ、文様等の細部は安土桃山時代から江戸時代初期にかけて確立したものとされます。種類は大きく4つに分類され、最も多くの演目で用いられる襲装束^{つねしょうぞく}、袍^{ほう}に蛭絵^{へびえ}という円形に描いた文様が刺繍されている蛭絵装束^{へびえしょうぞく}、「蘭陵王」など特定の演目で用いる固有の装束である別装束^{わかしょうぞく}、そして、元服以前の子供が舞う童舞用の装束である童装束^{わらわしょうぞく}があります。面をつける演目もあり、それに用いる面を舞楽面^{まね}と言い、大きさにより大面・中面・小面に大別され面相は面ごとに異なります。鮮やかで美しい写真の数々は、装束の細部まで見るすることができます。この他、舞楽以外の装束についてはもちろん雅楽の成り立ちや楽器の解説なども書かれており、雅楽の入門書としてもぴったりな一冊です。

眺めているだけでタイトル通りの『美しき雅楽装束の世界』に飛び込める本書をぜひ手に取ってみてください。

『美しき雅楽装束の世界』 遠藤徹著
青木信二撮影 淡交社 2017
請求番号●J132-577



つちや えり ● 展覧会で見た正倉院の五絃琵琶に感動しました。

私のおすすめ

ひそやかな音楽、響きわたる孤独

図書

図書館嘱託職員 木暮照美

今回紹介させていただくのは、スペインの作曲家、フェデリコ・モンポウ(1893～1987)の伝記である、『ひそやかな音楽』です。私が彼の作品を知ったきっかけは、学生の頃に聴きに行ったアンヌ・ケフェレックのピアノリサイタルです。その時にアンコール曲として演奏されたのが、彼が生涯にわたって創作した連作である、「歌と踊り」第4番でした。ケフェレックの優しい音色と相まって、穏やかな気持ちになったことを今でも覚えています。

この本は、彼が生前親しくしていた友人、ジャネス・イ・オリベの息女であるクララ・ジャネスによって著され、ピアニストの熊本マリによって日本語訳されたもので、モンポウの生涯や作品、交友関係等のエピソードがとても丁寧な筆致で書かれています。家族が鐘鋳造の工場を営んでいたこと、そこで鐘の構造や音の響きを探るのに夢中になっていたこと、バルセロナで行われたフォーレの演奏会をきっかけに音楽を志したこと、スイーツの販売を手がけていた時期があったこと、などなど…。文章だけでなく、写真や手紙、自筆譜など、図版も充実しており、様々な角度から彼の生活や人間性が垣間

見えるような1冊となっています。

個人的に興味深かったのは、随所に挿入されている作品のスケッチの数々です。言葉少なでシンプルではあるが、素材一つ一つを大事に扱おうとしており、それでも時折迷いがあるような筆致からは、彼の性格や内面での葛藤が見えてくるようでした。他にも、自ら考案したピアノの調律法や和声のメモなども載っており、何かを生み出そうとしていた静かな強い意志を感じます。

それらを見て想像力を巡らせた後、本文中のモンポウの言葉「私の目的は、最も研ぎ澄まされた内なる耳でも容易には出会えないような響きを創り出すことでした。逆に、私の人生はまったく内面的そのものです…。私の心のうちでは、決して表には出てこない不思議なことどもが次々と生まれています(略)」を読むと、それがより深みをもって自分の中に響くように感じられました。



『ひそやかな音楽：フェデリコ・モンポウ生涯と作品』クララ・ジャネス著 熊本マリ訳 東京音楽社 1993 請求番号●C58-373

こぐれ てるみ ● リニューアルしてより快適な空間になった図書館で働けることが嬉しいです。どうぞよろしくお願いたします！

Information

自宅からも図書館をご活用ください！

図書館が契約しているオンラインデータベース、楽曲・映像配信サービスを使うと、自宅から調べものをしたり、論文などを読んだり、音楽や映像を視聴することができます。ぜひご活用ください(学外から利用できるのは国立音楽大学の学生・教職員のみです)。また、WebOPACやデータベースの利用方法は図書館ホームページでご案内していますので、あわせてご覧ください。



オンライン授業に伴うサービス

大学のオンライン授業の開始に伴い、5月よりオンライン授業対象の学生と教員へ下記のサービスを行っています。

- ・資料の宅配貸出
- ・文献複写郵送サービス
- ・レファレンスサービス

図書館資料活用のため、オンライン授業期間中は継続して実施します。詳しくは図書館ホームページでご確認ください。

開館日程などにご注意ください。

今年度は開館日程が例年と大幅に異なっています。また、利用できるサービスに制限のある場合があります。詳しくは図書館ホームページでご確認ください。

■ 表紙：原怜那 武蔵野美術大学造形学部デザイン情報学科3年
 ■ 発行：国立音楽大学附属図書館
 ■ 編集担当：高橋京子・宮部真砂子

■ 国立音楽大学附属図書館
<https://www.lib.kunitachi.ac.jp>
 E-mail info_lib@kunitachi.ac.jp